
虹の袂魔師

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の被魔師

【Nコード】

N1746Z

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

被魔師^{エクスシスト}が題材となっています。ぶつちやけサブキャラの方が強いんじゃない？と思う方もいらっしゃるでしょうがそこはお見逃し下さい。主人公は女性のほうですので。あしからず。

プロローグ 始まりの日

周りが燃えている様に赤い。周りには静寂が満ち溢れていた。

「お姉ちゃん、どこ？私を置いて行かないでよ。どこにいるの？お姉ちゃん」

そんな街中の公園で顔を伏せながら、泣いている少女がいた。すると近くの草むらから、女性が出てきた。

「鈴音？どこ？」

「お姉ちゃん？どこ行ってたの？私、心配したんだからね！」

「あはははっ。心配性な妹ね。ちよっと知り合いに会ってただけよ。あ、そうだ。いい機会だから紹介しておきましょう」

そう言って少女の姉は、草むらの向こうに手を振った。すると、草むらから新しい人が現れた。少年だった。周りの暗さの所為で、顔は見えなかったが。

「紹介するわ。彼は私の知り合いで　君って言うの。鈴音とちよつど同年代だから、仲よくしてあげてね。それで　君。こっちは私の妹で、星川鈴音って言うの。よろしくしてあげてね」

名前の部分がちよつど聞こえなかった。まるで上から封をされているように。

「よ、よろしくお願いします」

少女は姉の足の後ろに隠れながら、挨拶をしていた。

すると、少女の姉と少年は笑い始めた。するとおろおろと少女が慌て始めた。

「こちらこそ、よろしく。今度こちらの小学校に転校するんですけど、その時はよろしくお願いしますね」

「う、うん。わからない事があつたら、何でも訊いてね」

「はい」

どもっている少女とは違い、少年ははっきりと答えていた。そんな二人の違いに少女の姉は爆笑していた。

「ちょ、ちょっとお姉ちゃん！そんなに笑わなくたっていいじゃない！」

「だ、だって鈴音、どもりすぎ。そんなに緊張しなくたって、悪い子じゃない、って」

「あゝあ、言っちゃった。言わないように、してたつてのに。俺は知らないよ、もう。それじゃ、俺はこの辺で失礼するよ。じゃあね」

「はいはい、それじゃバイバイ。また明日ね」

「さ、さようならー！」

どもりながらも、少女は手を振って挨拶をした。

「はい、さようなら。星川さん」

少年も振り返り、手を振って離れていった。

そして少女は姉と少し話をしながら、家に帰宅した。そして家族で談笑し、晩御飯を食べて、姉と一緒に風呂に入って寝た。

その日はすぐ眠れなかった。少年の事を思い出して、テンションが上がってた所為だ。突然、周りが真っ暗になって、その闇から『声』が語りかけてきた。

『我が契約者よ。封印の猶予はもう間もなく終了する。その時に、
汝と私の契約により定められた目覚めの時だ!』

そして少女は過去の眠りから解放される。

プロローグ〈始まりの日〉（後書き）

自分が初めて書いた作品です。最初は学園編ですが、後からは学園編では無くなります。あしからず。

転入生

9月1日、二学期の始業式を迎えた今日私こと星川鈴音は、まだ続く猛暑に苦しみながらも私の机に集まっていた友人たちと喋っていた。

「ねえ、そういえば、鈴音知ってる？今日うちのクラスに転入生が来るんだって」

「なにい、それは本当か？その転入生って女子なのか？男子なのか？教えてくれよ」

そう話しかけて来るのは私の親友の篠月棗である。その声に反応したのは坂田玲二君。

棗ちゃんはいつも元気いっぱいな女の子だ。髪の色は金髪。昔、染めてるの？と訊いたらこれは地毛だと怒られた。容姿はモデル張りの体系をしている。趣味は女の子らしく買い物とか料理なんだけどね。

玲二君は、っていうか玲二君も元気すぎるくらいの男子だ。髪の色は茶髪がかつた赤色で、容姿は筋肉があるんだけど?????引き締まったかんじな付き方をしている。まあ、それはどうでもいいんだけど。趣味は外見通り、筋トレとか言っていた気がする。

その会話にある男子が乱入してきた。

「男子みたいだよ。なんでもイタリアから来たらしいよ。日本人みたいだけど」

そう言ったのは進藤光一君。坂田くんの親友である。光一君の髪の色は銀で、特徴というところ、ここの年代とは思えない位に落ち着いている所かな？趣味は読書。

「はあ？海外に居たのに日本人って????????何かおかしくね？」
「それ、私も思った。どういうこと？」

そう言ったのは、玲二君と棗ちゃんだった。私も口には出さなかったけど、不思議に思った。そんな質問もわかっていたのか、余裕そうに光一君は答えた。

「ええつと、なんでもイタリア本部の方に留学してたらしいんだけど、前の学校を何か事情があつて通えなくなつたから。こつちに転入してきたんだって」

「はあ。その転入生もいろいろ大変だったんだな」

「でも、うちの高校って周りの高校に比べたら偏差値高いわよね。」

それにこの高校って結構特異だし、その転入生君はそのところ大丈夫なのかな？」

「えつとね、大丈夫みたいだよ。何でもその転入生、偏差値70以上みたいだから」

「70以上つて????????その転入生、一体何者？」

これも、そう思ったが、やはり口には出さなかつた。

「まあ、転入生の話はここまでにして。なあなあ、昨日のあのドラマ見た？」

「食いついてきた割に引くの早いわね」

「えー。別に良いじゃんか。興味無くなつちまつたんだから」

「ま、いいけどね。それでドラマの話だっけ？見たけど、あれは????????」

もう他愛も無い話に変わっていた。そんな一風変わったと所もこのクラスの特徴だ。

(転入生、か????????。本当にどんな人なんだろ?)

始業式も滞り無く終わり、教室に戻っている時に棗ちゃんが話しかけてきた。

「いやー、もうすぐ転入生の姿を見れるね。ねえ、どんな人なのかな?」

「棗ちゃん、なんでそんな元気なの?」

「んんー?そういう鈴音はなんか眠そうだねえ」

「だって、校長のどうでもいい話もそうだけど、元々この頃なんか寝不足だったんだ。何か変な夢のせいで良く眠れなかったんだ」

「変な夢?そんなもん見たの?まあ眠そうだな、とは思ってたけど私の言った言葉に顔しかめながら、棗ちゃんは聞いてきた。

「そう。なんか、『もう目覚めの時だ』とか、何とか」

「ふーん。ま、そんな変な夢は転入生との出会いで吹き飛ばせ!」

「もう、気楽に言ってくれるな」

でも、話をしたおかげで、ちょっと心がすつとしたのは言わないでおく。言ったらまた調子にのりそうだから。

5分後、担任の先生が教室に入ってきた。ちなみに名前は風間真先生。

「ええー。2学期もまた、元気な皆の顔が見れて先生も嬉しい。さて、普通なら宿題の回収をする所なんだが。先にやらちゃいけないことがある。まあ知ってる者もいると思うが、このクラスに転入生が来ることになった。さて、入ってきなさい」

その言葉と共に、教室のドアが開いた。クラスの皆の視線は、扉に釘づけになった。

扉が開いた先にいたのは、日本人と聞いていたに、髪の色は銀色だった。そして、手にレザーグローブを嵌めていたのと、腕輪をつけていた。それに、顔の方もモデルと同じぐらいで、身長の方は百七十センチぐらいあった。

クラスの皆が啞然としている中で、転入生は自己紹介を始めた。

「初めまして。今日このクラスに転入してきました、炎藤三剣です。これから色々よろしく願います」

転入生（後書き）

同日投稿。b y ドラえもん。それではまた後ほど。

転入生との会話

当然だけど、転入生のあまりに日本人らしからぬ姿を見て、啞然としていたクラスメイトは答えられず、固まっていたのを見かねて先生が助け舟を出してくれた。

「炎藤への質問などは、休み時間などにしてくれ。あと、炎藤。君の席は星川の隣だから。ほら、あそこだ。星川、しばらく彼に教科書とかを見せてやってくれ。転入生の紹介も終わった事だし、宿題集めるぞー。早く用意しろ」

そこでクラスの皆も意識を取り戻した。「ええー面倒くせー」とか文句を言ってる人もいたけど、私はそれどころでは無かった。

転入生が自分の席の隣に来るというんだから。まったくシャレにならない。いや、シャレじゃないんだけども。

私は知り合いぐらいにもなれば大丈夫なんだけど、全然知らない人に話しかけるのは大の苦手だからだ。

そんな事を考えていると、隣の席に座った転入生の炎藤くんが話しかけてきた。

「ごめんね。これから色々お世話になると思うけど、よろしくお願いますね。ええーと、星川さん？」

「えっ、ああ、うん、よろしく。?????????てなんで私の名前を知ってるの？」

そんな私のまぬけな質問に、炎藤くんは苦笑しながら答えた。

「さっき、風間先生が仰ってたじゃないですか。星川の隣な、って」「えっ?あ、そっか。そういえば、そうだったね」

そんな事も忘れていた私は、なんとか笑ってごまかした。そんな下手な会話していた時に、ちょうどチャイムが鳴った。

「うわ、チャイム鳴っちゃったか。まあ、いいか。次の時間にホムルームするから、誰も帰るなよ」

その言葉にクラスの皆は「ええー」と言っていたが、風間先生はそこらへんの対策も抜かりがなく、即座に炎藤くんを盾に使っていた。

「炎藤に聞きたいこととか色々あるだろ？この休憩時間に色々聞いとけ。そんじゃ、次の時間までちゃんと待ってけよ」

当然、炎藤くんが聞き逃すはずもなく

「ちょ、ちょっと、風間先生！俺を身代わりに使わないでくださいよ！」

そんな彼の苦情を先生は軽くスルーして、教室を出ていった。私はスルーされた事に落ち込んでいた炎藤君に、慰めの言葉をかけていた。

「まあまあ、風間先生はいつもあんな感じだから、気にしないでね？」

「あ、ああ。うん、大丈夫。気にしてくれてありがとう」

そんな事を笑顔で言うので、つい私は照れてしまった。

(でも、私的には先生に苦情を言ってた時みたいな、喋りの方が

私は嬉しいな?????????)

そんな事を考えていると、急に黙った私を心配してくれたのか、炎藤君が喋りかけてくれた。

「ええっと、星川さん？大丈夫ですか？」

「え、うん。大丈夫。心配しないで」

あまりにも早いスピードで言ったものだから、炎藤君はびっくりしていた。

「はあ、そうですか????????」

そんな事を喋っていると、チャイムが鳴った。そこで、風間先生が戻ってきた。

「そんじゃ、ホームルーム再開するぞ。全員、席に着けー」

ファミレスにて

その二十分後、やっとホームルームが終わった。風間先生が教室から出ていくと、みんなちりじりに動き出したのを確認すると、玲二君、光一君、棗ちゃんが私の席ごと炎藤君に喋りかけていた。

「えっと、炎藤だけ？俺はクラスメイトの坂田玲二だ。これからよろしく！」

「私は篠月棗。まあ、同じくクラスだから喋る機会も色々あるだろうけど、よろしくね。」

あ、隣の子は自己紹介してないみたいだから、一応言っておくけど。隣の子は星川鈴音って名前だから」

「遅ればせながら。僕の名前は進藤光一。これからよろしく」

そんな風に皆が自然に自己紹介をするので、炎藤君も呆然としていた。っていうか、棗ちゃん。さらっと私の自己紹介しないでよ。後でする気だったのに。

「んー？だって鈴音に任せてたら、すごい時間がかかるんだもん。それに、こっちの方が早いじゃん。違う？」

それはそうなんだけど????????普通、自分で言いたいと思うのが普通なんじゃないかな？

っていうか、いつものことながら、何で私の考えている事がわかるんだらう。超能力？

「ふふん、鈴音の事なら大抵はお見通しよ」

「女子共の話合いはその辺にしといて。この後、暇か？暇だったらさ近くのファミレスで、お前さんの歓迎会をやりたいたいんだけどさ。」

って言っても、メンバーこれだけだけど」

さすがに私もこの発言にはびっくりした。

「え、何それ！あたし聞いてない！」

そうあたしが言うと、坂田君はこう言って返してきた。

「ふっ、当たり前だろ。ホームルームの時間にアイコンタクトで決まったからな。」

っていうかわかってたら、逆にこっちがびっくりだわ。おまえは超能力者か？」

そんな事を話していると炎藤君が話に介入してきた。

「ええっと、坂田君に篠月さんと進藤君？別にこの後は暇だから別に構いませんけど、この学校は^{エクソシスト}被^{エクソシスト}魔士を育成するために作られて、そしてその能力を悪用しないように全寮制にして、門限もあるって聞いてますけど？」

そう。この学校の名前は国立^{エクソシスト}被^{エクソシスト}魔士育成高等学校という。目的はその名の通り。

この学校は確かに全寮制だが、守っていない生徒の方が圧倒的に多いのだ。

それじゃあなんでそんな高校ができたのかは????????また後で説明しよう。

そんなことを考えていると、坂田君が説明していた。

「まあ確かにそうなんだけどな、でもほとんどの生徒は、守ってないぞ。まあ、学生なんてまだまだ子供だからな。色々やりたい事が

あるんだよ、きつと」

それを聞いて炎藤君は啞然としていたが、ほんの一瞬で平常を取り戻していた。ちよつと考えた後、私達に行く、と返事をした。

その後、校門を出て、近くのファミレス『アスリカル』に到着した。そこでとりあえずドリンクバーを注文して、ひとまず席に着いた。話をしていく内に空気が和んだら、坂田君が炎藤君に質問した。

「そういえば、訊きたい事があるんだけど、いいか？」

「え、何？とりあえず、何でも訊いけていいよ。答えられないのは、無理って言うから」

「わかった。じゃ質問なんだけど、お前って日本人なんだよな？」

「うん。そうだけど、それがどうかした？」

「じゃあさ、髪が何で銀髪なんだ？見たときから気になってたんだけど」

皆、同じことを考えていた。どう見ても、染めてるようには見えないし?????。

自分の髪を弄びながら、炎藤君は説明してくれた。

「あ、これ？俺はさ、父さんが日本人で、母さんはイタリア人なんだ。つまり、俺はハーフってこと。それで、眼と肌は父さんから、髪は母さんのが遺伝したってこと」

「へえ、そうなんだ。つうか、ハーフって初めて見たよ」

その後、イタリアの話の訊かせて貰った。ゆるい雑談を始めて二十分後に突然、炎藤君と進藤君が立ち上がった。

不思議に思った坂田君が二人ともに聞いた。

「ど、どうした？突然立ち上がった。まだ門限まで時間あるけど????????」

悪魔との戦い(1)

それに遅れて悲鳴が外の音を満たした。その中に悪魔だ！悪魔が現れたぞ！と、叫んでいる人がいた。そんな声を聞いて固まっている私達に、炎藤君は怒声をぶつけてきた。

「何、固まってるんだ！動け！動いて一人でも多くの市民を救え！これは俺達、退魔士に課せられた義務だ！わかったらとつと動け！」

「待てよ！そういうお前はどこに行く気なんだよ！一人だけ逃げる気か！」

「俺は????????元凶を断つ」

「はあ？お前????????自分の言っている事が、どんだけやばいか、分かってんのか！もしもその悪魔が集団で来てるんなら、トップは中級、上級悪魔だぞ！俺らに対応できるレベルじゃない！個人で来てるなら下級レベルだけど。それだって一人じゃ倒しきれないと、教えられているじゃないか！」

「じゃあお前は倒しきれないからって諦めるのか？違つたる！エクスリストならどうやっても死んでしまうような場面なら、より多くの一般人、或いは仲間を救ってから死ね！」

何もしないで死ぬなんて、そんなのはただの犬死だ！」

炎藤君はなおも何か言おうとしたが、時間の無駄と判断したのかすぐに店を出た。

ただ一言を言つて店を出て行った。

「ごめん。まだ見習いみたいなものなのに、言いすぎた。逃げるならせめて、先生達に連絡を入れてくれ。それじゃあまた後で」

私達は約一分後に、玲二君の言葉で市民を助けるために動き出し

た。

その言葉はこうだった。

『おい、こんなんで良いのかよ。あいつに????????炎藤にだけ任せておいて。気に入らねえ。俺達でやるうぜ。あいつを皆で見返してやるうぜ!』

幸いにも、市民のほとんどはもう逃げ終わっていた。

だけど、反比例するぐらいに、悪魔がそこらじゅうにいた。そして、炎藤君を探し始めて5分後に、やっと炎藤君を見つけた。しかもその時、悪魔との戦闘中だった。戦闘は炎藤君の方が有利だった。そう判断したのは、5体ほどいた悪魔がずたぼろで満身創痍という感じだったのに対して、炎藤君は刀を持って無傷で構えていたからだ。そして手の中の刀は、聖なる波道を放っていた。私達を横目で見て、私達に叫んでいた。

「何で来た!言つたら!先生達に連絡しろって!」

そんな事を叫んだ炎藤君にむかって、こちらも叫び返した。

「何よ!私達があなたの事を放っておける、とでも思ってるの!? 私達は????????一緒に闘う仲間じゃない!」

一瞬、言葉に詰まったが私は一体何を言おうとしていたのだろうか? だがそんな事を考えるのは、後回しだ。見つめているとため息をついて、私達に言った。

「わかった!じゃあ、術式でのサポートを頼む!」

「了解!じゃあ、皆いくよ!」

「了解!」

「我、放ちたるは全てを凍てつかせる氷の弾丸！」エクトブラスト
！」

「来たれ！汝らはあらゆる物を貫く雷撃の槍なり！汝が刃を持って我が敵を貫かん！」

「レイズエツジ！」

「大気に眠りし精霊達よ。汝らが光を持って、我に仇名す敵を討て！」

「夜の闇に潜み、闇夜に名を連ねし精霊達よ。その闇を持って我に仇名す敵を討て！」

玲二君と棗ちゃんが放ったのは天術で、私と光一君が放ったのは精霊術である。

何が違うのかと言われると説明が難しいんだけど、ぶっちゃけると天術は己の中にある天力を用いて放つ技。精霊術は異界にいる精霊の力を借りて放つ術なんだ。

天術は、自分の血の中にある天力を天術陣 通称、天陣とされる物に、注ぎ込んで放つ術。精霊術には術式がいらぬ代わりに、威力が低いんだ。

えっ？何でそんな物があるのかって？しょうがない、説明しよう。天力は8年前の戦争の時に神様から与えられた力なんだ。

その戦争が何だったのかは、後々語る事になるだろう。

今は闘いに集中しようじゃない。私達が放った術はそれぞれ悪魔に命中した。

元々傷ついていたせい、悪魔達は攻撃が当たった瞬間、塵になつて消えた。

最後に残された悪魔は、炎藤君の刀に切られて、同じように塵になつて消えた。

炎藤君は刀を持って警戒を維持したまま、私達に話しかけてきた。

「君達???????何でまだここに残ってんの？俺は戻れって言っ

たよね、確か」

その質問に答えたのは私だった。

「いや私達にも出来る事があるんじゃないかな、と思ってね」
「俺の心臓に悪いからやめてくれ」

本当に顔を真っ青にしていたので、謝罪しておいた。
そんなやり取りをしていると、凄まじい魔力の波動が流れてきた。
その瞬間、私達の前方二十メートルぐらいの場所に突然、悪魔が
現れた。

「????????さつきから、配下達がやられていると思ったら、あ
なた達の仕業ですか?」

「そうだ、と答えたら????????どうする?」
「決まっています。死んでいただきます」

「だってよ。????????なあ、お前が、この場所が気に入ってる
と思うならさ。そろそろ本気で戦うべきじゃないか?いいところ見せ
つけてやるうぜ」

そんな言葉を言っている、炎藤君に返事したのは、驚く事に進藤君
だった。

「そう????????ですね。《光》としての役割を、果たさないと
いけませんよね」

「《光》?まさか貴様が『光龍王』だということのか!??」

「そんな風には呼ばれるのも、いつ振りでしょうねえ!」

「さあな、俺らをそんな風に呼ぶのは悪魔達だけだからな。

いつもはこんな風に名乗らないんだけどな。今回は名乗らせてもら
おう。

『彩炎の龍騎士』・炎藤三剣、推して参る」

「それじゃ俺も名乗ろうかな。????????? 『閃光の龍騎士』・進

藤光一、参ります」

悪魔との戦い(1) (後書き)

この作品のエクソシストは術式系と武術系の二つが存在します。主人公たちは両方とも使えますが。ちよつとしたチートみたいなものです。

それでは今日はこれまでで。

悪魔との戦い(2)

そんな私達を、置いてけぼりにしてスケールの大きすぎる会話が
行われていた。悪魔の方を見ると、歯軋りしながら叫んでていた。

「馬鹿な！こんな極東の地に『セイオウキョウシ聖龍騎士団』の団長が二人もいるだ
と！？そんな馬鹿な事が、あつてたまるものか！」

聖龍騎士団 それは、イタリアのローマ法王庁にある騎士団
である。その騎士団には合計で七つの部隊がある。

《炎》、ファイア、《水》、アクア、《氷》、ギアッチョ、《雷》、トゥォーノ、《風》、ヴェント、《光》、ルーチェ、《闇》、ブリーオこの七
つだ。

どの騎士団にも異能力者がいるらしい。そのため、競争率も凄いと
訊いた事がある。

なんで騎士団の名前が属性の名前なのか。それはこの七つの騎士
団の各師団長が、その属性の龍王と契約しているからだ。それは裏
を返せば龍王達と契約さえすれば、師団長になれるっていうこと。
だけど、龍王達にも好き嫌いぐらいはある。

だから龍王達と契約するためには、龍王達が出す試練をクリアし
なくちゃいけない。つまり、今の師団長はそれぞれがトップ級のエ
リートなのだ。そんな強い人達のしかも、七人しかいない内の二人
もいれば、それは確かに驚愕だろう。

っていつか、2人がそんなエリートだった事の方が、私達にとっ
ては驚きだった。

だが二人はそんな驚きも見越していたのか、はたまた慣れきって

いるのかは分からないけど冷静に対処していた。

「残念だけど、これは事実。ま、自分の運のなさを呪うんだな。いくぞ《光》」

光一君は、炎藤君の言葉に頷いて、手を合わせながら祝詞を唱えていた

「わかりました。我が内の中に眠りし剣よ、今汝が姿を現せ。汝はかの英雄ランスロットが振るいし剣、汝が銘はアロンドイト！」

掌から出現した剣は西洋剣だった。アロンドイト?????????確か円卓の騎士団の一人、ランスロットが使っていた剣の名前だ。

「へえ。それ使うんだ。珍しいな。てつきり、オートクレールでも使うのかと」

「まあ、相手は上級悪魔っぽいですしね。尊厳を持って戦った方が良いでしょう?」

「俺は文句は言わん。ただ珍しいな、と思ったただけだ。じゃ、やるか。俺は天術を使ってサポートにまわる。お前は剣で討て。いいな?」

「ええ、わかりました。あ、そうだ。玲二、ちょっと!」

戦い始める寸前に、光一君は玲二君を呼んだ。

「な、何だ?」

「彼女達の事、頼んだよ。あと、戦闘が始まったら、この札を使って結界を張って隠れといて。わかった?」

そう言つて光一君は玲二君に4枚の札を渡していた。

「ああ、わかった?????????死ぬなよ?」

「当たり前。っていうか、誰に向かって言ってるの。じゃあ、行ってくるよ、親友」

「おう。頑張れよ」

そう言っただけで空中で拳をぶつけあった。その時、炎藤君が光一君に喋りかけてきた。

「もういいか？そろそろ行くぜ」

「ええ、大丈夫ですよ。じゃあ、皆」

「行ってきます」

炎藤君が進藤君と、同時に行ってきた。こう言われたら、言い返すことは決まっている。棗ちゃんと坂田君も、考えていた事は、一緒だったようなので一緒に言った。

「行ってらっしゃい！」「行って来い！」

その言葉と共に、二人は駆け出した。

悪魔との戦い(3)

「人間風情が！たえセイヤチカトキヤイツ聖龍騎士団の団長といえど、簡単に私を倒せるとでも思っているのか！？なめるなよ！」

悪魔はそんな事を言いながら、魔術を使って攻撃してきた。

「あんだこそ、分かってない。セイヤチカトキヤイツ聖龍騎士団の団長って言うのはな？
??????」

「一人ひとりが、魔王すらも倒せる実力を持つてるんだ(ですよ)！」

だけど二人には魔術の余波すらもかすりはしなかった。

そして、さらに悪魔との距離を詰めた。そこで炎藤君は天陣を構築し始めていた。悪魔は十メートルに差し掛かったところで、剣を出現させて近接戦闘になった。悪魔と光一君は激突し、戦闘が始まった。その戦闘は苛烈を極めた戦いになった。

だけど、悪魔はすぐに競り負けた。進藤君の剣が速すぎたのだ。光一君の剣術は、神速といっても差支えないほどの速度だった。なにせ、剣の残像が攻撃のたびに、増えていくぐらいなのだから。

私と棗ちゃんには残光ぐらいしか見えなかったが、玲二君には見えているらしい。光一君の連続攻撃を受けて、悪魔は膝をついた。

悪魔が膝をついたので、戦闘は終わったんだと思って、結界を解いたのがミスだった。

その瞬間、悪魔は力を振り絞って、私達に魔術を撃ってきた。異変に気付いた炎藤君が、助けに入ってくれた。天力で障壁を張って魔術を受け止めていた。

だけど、その魔術は相当の威力があった。炎藤君でも、そう簡単に消すことはできなかった。炎藤君は数秒間、眼を閉じた。そして

次に眼を開くと、炎藤君の眼に六芒星が浮かんでいた。そして眼から術式が出てきた。

「その魔術に介入、及び干渉。その後、魔術の破壊」

そう炎藤君が呟いた直後、術式から光が絡みつき魔術は消え去った。そして炎藤君は、構築していた天術陣の天術の文言を唱え始めた。

「其はあらゆる物を飲み込む、無限の焰なり。」

其が焰を持って、汝が炎を浴びし者を浄化せよ。

我が力の元、我が敵を討つ深淵の龍となり敵を飲み込め。

『ベイルズ炎獄の（・）ベルイアンマ絶焰』

炎藤君の出した炎は、龍の姿になって悪魔を飲み込んだ。悪魔は防御壁を張って防いでいたが、それも時間の問題だった。三段文言の天術なんて初めて見た。?????あんなすごい威力なんだ。私達学生が使えるランクは一段。有能な人でも二段。三段ともなると、頭が良い人が寝る間も惜しんで研究しないと使用できないレベルなんだ、と教えられた。

今の導師様は全員使えるらしいけど。三段文言を使える人は本当の天術使いなんだ、と風間先生は言っていた。おっと、それよりもちゃんと戦いを見ないと。悪魔は炎藤君の眼を見て、愕然とした顔を見せた。その後、炎に包まれながらもフツと納得したような顔をしながら、言った。

「君達はいつか後悔するだろう。これだけは言っておこう。さて名残惜しいが、ここまでのようだな。せめて名乗ってから去るとしましようか。」

紳士淑女の皆さま、私は最上級悪魔であり、インド系の魔王アスラ

に名を連ねる者。名はアガースラと申します。それでは、御機嫌よう」

そう言い残し、アガースラは塵になって消え、悪魔達も去って行った。その後、炎藤君と進藤君は「明日会ったら、全部話すから」と言っただけで去っていったので、私達は何もできなかった。

学園から先生たちが来て、私達に「後は先生たちがやっておくから、もう帰りなさい」と言ったので、私達は先生の言った通り、寮に帰ってシャワーを浴びながら、今日の事を考えていた。転入生の登場。悪魔の襲来。

????????そして、その転入生と友達が実は聖龍騎士団の師団長だった。

だけど、考えてみても何も分からなかった。それが当り前なんだろうな。そう納得して、考えるのをやめてすぐに寝た。その日に見た夢は、悲しかったような気がする。

悪魔との戦い(3) (後書き)

試験終了直後の第一発です。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1746z/>

虹の祓魔師

2011年12月10日15時53分発行